

# 一般社団法人日本児童養護実践学会 第17回研究大会

日時:2025年3月8日(土)

場所:四條畷学園短期大学(大阪府大東市学園町6-45)

大会テーマ:「子どもの声を聴く-真の子どもの権利擁護のために-」

11:00~12:30 基調講演

講演テーマ「施設の主人公は子どもたち ~当事者・支援者の立場から今伝えたいこと~」

講師 蛭沢 光氏 (特定非営利活動法人ひだまりの丘 理事長)

13:40~17:00 分科会

## 分科会発表一覧

### 第1分科会 「社会的養護実践における家庭支援・施設運営①」

#### 1. 地域における児童養護施設の役割-東京育成園がA地区に担う役割-

鹿山 香純(東京育成園 里親等委託調整員)、土屋 龍生(同 ケアワーカー)

現在児童養護施設では、施設で生活する子どもだけではなく、地域支援を含め、より多機能化していくことが求められている。実際にどのような役割が求められているのか、児童養護施設である当園が地域において担える役割を検討し明らかにしていくことを目指し、研究を行った。研究に際しては地域の関係機関や子育て世帯の保護者への調査を行い、地域で求められているニーズを明らかにしたうえで、当園として担いうる事業に関する考察を行った。

#### 2. 児童学は児童養護実践に何をもたらすのか-その理論的および実践的考察から見えてくるもの-

小田桐 忍(聖徳大学 教授)

指定保育士養成施設のうち、四年制大学や短期大学は児童学科や子ども学科を名乗り、その授業科目として児童学や子ども学を設置する場合が多い。弊職も前任校では子ども学、現任校では児童学を担当した。特に後者では、児童学概論と児童学演習という科目名称を使用した上で、その授業形態と授業内容について大学側に説明する責任を果たした。そこで本報告では、当該科目の児童養護実践における意義にまで踏み込んだ考察を行いたい。

#### 3. A施設におけるコミュニティソーシャルワーク実践の再考-職員意識調査から課題を探る-

北川 進(日本社会事業大学 専門職大学院 講師)

A施設が長年にわたり取り組んできた地域活動や地域支援について、現在の職員がどのような捉え方をし、将来ビジョンをどう描いているのかを意識調査から探り、今後のA施設が担うコミュニティソーシャルワーク機能の役割や機能について考察する。

#### 4. こどもの居場所支援事業の取り組みについて

今井 修(社会福祉法人大和育成園 宇陀ほっとスペースつどい 所長)

こどもの居場所支援事業についての取り組み(地域支援、業務内容、他機関連携など)

#### 5. 保育士養成校学生による地域子育て支援拠点でのオレンジリボン運動の有用性-社会資源育成の観

点からー

**松本 充史(東海学院大学短期大学部 幼児教育学科講師)**

保育士養成校学生による地域子育て支援拠点におけるオレンジリボン運動の有用性について考察した。方法はオレンジリボン運動を行った保育士養成校学生にインタビュー調査を実施し、データを抽出し、質的研究法を用いて解析を行った。

## 第2分科会「社会的養護実践における家庭支援・施設運営②」

### 1. 同一法人における乳児院から児童養護施設への措置変更に係る研究

**林 知然(東洋大学社会 福祉学研究科・山梨県立大学 博士後期課程・専任講師)**

先行研究から同一法人・敷地における乳児院から児童養護施設への措置変更は子ども・親にとって有意性が認められると言えるが、その有意性が発揮できる法人は限定される。そのため両施設職員 10 名へのインタビュー調査を実施し、質的に考察した。その結果、両施設間が日々の関わりから親しみを感じ取りやすい紐帯づくりを行い、高程度の措置変更前後の交流を通じ、また児童相談所の協力も得ることで措置変更の有意性を実現している。

### 2. 児童養護施設における心理的安全性の導入に関する取り組みについて

**人見 禎昭(社会福祉法人 善照学園 心理士)**

**山本 邑太(姫路日ノ本短期大学 講師)**

本発表では、R4 から児童養護施設に心理的安全性の概念を導入し、その経過及び結果をまとめた調査を基に施設における心理的安全性の重要性について発表する。児童養護施設では生活支援や心理支援は基より専門性の向上や人材育成、離職防止、さらには被措置児童等虐待防止といった課題に直面しているが、その中で心理的安全性が何故重要なのか様々な側面から考察をし、フロアの方々とディスカッションをしていく予定である。

### 3. 地域小規模担当者の自主的勉強会の取り組みについて

**勝原 駿(児童養護施設 博愛社 副主任)**

現在、各児童養護施設では国の方針に則り、家庭養育の代替え機能として、小規模化、地域分散化が進められています。しかしながら、全国での研修などで先進的な取り組みを少し知っていても、大阪市内の担当者同士でもそれぞれの取り組みはほとんど把握していないというのが状況です。まずは、足元からきちんと現状を把握し、支援の在り方や働き方にも視線を向け、意見交換や情報の共有し現状の取り組みを半歩でも進め実践する有志の会として、2021 年 8 月からスタートしました。その取り組みをお伝えしたいです。

### 4. 里子の自立支援における課題について

**阪野 学(四条畷学園短期大学 教授)**

家庭養護の推進により里親での社会的養護を必要としている子どもたちの養育が推し進められている。しかしながら、あくまで里親は一介のボランティアにしか過ぎず、里子の養育について施設のように手厚く保証されていないものが少なからずあるのが現状である。今回は、その中で特に自立支援に着目して、アフターケアと保証人の件について発表者の実践から現状と課題について触れ今後の展望について考察を行う。

### 5. 認定前養育里親への意識調査から考察する効果的な里親支援とその可能性

## 谷 俊英(大阪大谷大学 専任講師)

2016年に改正された児童福祉法では、第3条の2において家庭養育優先の理念が謳われ、家庭養護のニーズはますます高まることになる。そして、そのニーズの高まりとともに、里親支援の重要性も増した。そこで本研究では、養育里親認定前研修の受講者にアンケート調査を実施し、その結果から効果的な里親支援の検討を行った。また検討した内容から、施設養護が培ってきた養育技術が効果的な里親支援となる可能性の考察を行った。

### 第3分科会「社会的養護実践における生活支援」

#### 1. 好きなものを他者に語るプロセス—その背景について—

神田 一希(社会福祉法人常德会 児童養護施設 興正学園)

日頃、子どもたちと関わっている中で好きなものを語る際、ある程度のパターンがあると感じている。そこで、ある程度言語化が正しく行える中高生を研究対象とし、半構造化面接で好きな物についてインタビューを行う。その後、逐語データからパターンを見出していく。子ども達の好きなことの語りはアセスメントの手掛かりになる場合が多い。そのため、日々の生活支援への有用性も担保されるものだと考えている。

#### 2. 研修を現場の実践に繋げる取り組み—性教育に関する研修を通して—

白根 由太郎(社会福祉法人光明会杉並学園 治療指導担当職員)、柏 明莉(同 児童指導員)

萩原 雄一(同 保育士)、日暮 康二(同 保育士)

子どもへの支援をより良いものにするためには、職員の資質向上が欠かせない。現在、そのための研修の機会は充実している。しかし、研修で得た学びを実践するには、施設の職員体制や職員集団の力量などを考慮し、現場に合わせた実践をする必要がある。そこで、実践に繋げることを予め想定した研修を企画した。その取り組みの結果から、研修と実践のサイクルが子どもへの支援の質の向上に寄与する可能性が明らかになった。

#### 3. 逆境体験の末、精神疾患を抱えた子どもの児童養護施設でのチーム支援—退所後に自死を凶ったAさんへの支援を通して—

塚本 亜沙美(社会福祉法人常德会 児童養護施設興正学園 里親支援専門相談員)

児童養護施設で虐待経験のある児童は約7割にのぼる。興正学園では、約8割の子どもが被虐待児童である。今回の実践報告では、約2年間入所をしていた、幼少期の逆境体験によってトラウマを抱え、精神疾患を患いながら、いくつもの施設を転々としてきたAさんに対し実践を行ったチーム支援について報告する。また、Aさんは、興正学園を退所後に、グループホームで自死をしている。退所後支援の在り方に関しても検討したい。

#### 4. 施設で生活する子ども達に対する SNS リテラシー教育とは—事例検討から他施設の傾向を探る—

玉村 京香(東京育成園 ケアワーカー)、梅井 陽子(同 ケアワーカー)

昨今 ICT 機器の普及に伴う SNS トラブルの低年齢化が進んでいる。児童養護施設にて生活する児童においても同様のことが言えるだろう。私たちはそのような施設で生活する児童をどうしたら守れるかを念頭に、子どもの最善の利益を尊重する支援を模索し研究・考察している。調査においては当園職員へのアンケートのみならず、他施設への調査も進め議論を重ね、当園でどのような活用・対策ができるか考察した。

## 5. A 児童養護施設における子ども間で発生している性的事故の把握ならびに性的事故の構造を明らかにする調査研究

林 知然(山梨県立大学 専任講師)、永野 真希(東京家庭学校 総務主任)

A 児童養護施設に入所している、また入所していた過去 10 年分の 73 名の子どもの入所前情報や育成記録などのデータを獲得・分析を行った。重ねて当施設職員へのインタビュー調査を実施した。その結果、73 人中 43 人の子どもに性加害・被害のかかわりが確認され、性被害を受けた子どもが加害者に転じている構造が明らかになった。また不用意な子どものユニット間移動を改めることや子どもへの丁寧なケアを点検する必要性が示唆された。

### 第4分科会「社会的養護実践における自立支援」

#### 1. 自立支援の基盤を整える小学生への学習支援－寺子屋事業－

鈴木 重男(公益財団法人明日佳 事務局長)

(公財)日本ライオンズは、児童養護施設の子供の自立支援を推進するためには、小学生段階からの学習の習慣化と学習の楽しさを味わう体験が基盤となり、学力が身に付き、将来の社会自立に向けた行動する力を培うことができると考えている。このことから、(公財)日本ライオンズは、児童養護施設の小学生への学習支援を行う「寺子屋事業」を全国 30 以上の児童養護施設で実施している。本報告は、この現状を整理したものである。

#### 2. 里親委託等を解除された者の生活実態－前回調査との比較から－

宮地 菜穂子(同朋大学 社会福祉学部 准教授)

里親養育経験者の委託解除前後の生活や就労の状況などを把握するため、X 県里親会連合会所属の里親・ファミリーホームを行う者へ委託されていた児童の内、2012 年 4 月～2017 年 3 月、または 2017 年 4 月～2022 年 3 月の過去 5 年間に 15 歳以上で委託解除された者を対象とし、その養育者等を回答者とした質問紙調査を計 2 回実施した。本研究は、生活やつながり等に関する実態および変化の有無等を探索的に明らかにすることを目的として実施した。

#### 3. 児童相談所保護経験者の情報開示に関する考察 2－開示した方の想い－

大村 海太(桜美林大学 准教授)

前回の発表では、情報開示請求に関する先行研究やプレ調査を通じて、ケアリーバーが施設退所後に抱く自身の生き立ちへの疑問や情報開示請求に対する期待について報告した。今回の発表では、その後の進捗状況として、情報開示請求を実施した当事者へのインタビューから得られた語りを分析し、当事者が情報開示を通じて得た感想や、それに基づく考察の一部を報告する。参加される方々とも、退所後の情報開示の意義について共に考える時間としたい。

#### 4. 社会的養護経験者を高等教育機関で受け入れるために

藪 一裕(京都文教大学 講師)

#### 5. 社会的養護からの大学進学－当事者・伴走者の視点から－

蛭沢 光(特定非営利活動法人ひだまりの丘 理事長)

発表者自身が 7 歳から高校卒業まで児童養護施設入所。退所後は大学進学。大学時代に社会的養護の当事者団体に参加し、2013 年 5 月から 2023 年 6 月まで団体の代表を務める。自身の体験談を踏まえ、退所者が進学した際に必要としてい

る支援について、朝日新聞厚生文化事業団進学応援金奨学生相談員としての取り組みと共に発表する。

## **6. 自立支援コーディネーターとして考える自立支援－自己理解と自己決定を目指して－ 山東 真以(こぼと学園 自立支援コーディネーター)**

「自立支援」で必要なことを考えた先にたどり着いたのが「自己理解」と「自己決定」でした。自分のことを理解していないと、自分の現在地に気づけません。現実を見ないことには将来へは進んでいけません。そして、子どもたち一人ひとりが自分で納得して将来を選択することが、自分の足で自分の人生を歩いていくことにつながります。ともすれば自立支援コーディネーターとしてどのような支援ができるのか、現在の取り組みを報告します。